

研究ノート

日中接触場面におけるインターアクション問題と 調整ストラテジーに関する一考察 —中国人日本語学習者側を中心に—

A Study of Interaction Problems and Adjustment Strategies in the Japanese-Chinese Contact Situation —With a Focus on Chinese Japanese Learners—

王 冰菁(湖南大学)

瞿 莎蔚(湖南大学)

Bingjing WANG(Hunan University)

Shawei QU(Hunan University)

Abstract

In this paper, I analysed conversations between Japanese native speakers and Chinese Japanese learners using the Language Management Theory. I aimed to clarify interaction problems and adjustment strategies adopted by those Chinese Japanese learners in the Japanese-Chinese contact situation.

As a result, language problems, communication behavior problems, and cultural behavior problems are observed in Japanese-Chinese contact situations, and there are many variations of adjustment strategies adopted by speakers, correlated with interaction problems.

1. はじめに

異文化コミュニケーションとは、「文化的背景を異にする存在同士のコミュニケーション」のことである。日中接触場面における中国人日本語学習者と日本人母語話者は異なる言語や文化背景を持つため、しばしばインターアクション問題が生じうる。外国人と日本人がインターアクションをする際に、言語、社会言語(文法外コミュニケーション)、社会文化の3つのレベルで問題が起こる(ネウストプニー1995)。その原因と解決策の究明は相互理解と日本語教育に重要だと言える。「学習者が参加する実際の場面を問題分析によって体系的に調査することによって、問題を明らかにし、そこから必要な教育方法を考えてい」き(村岡 2006 : 106)、日本語教育の出発点を実際場面の調査に置くべきものである(ネウストプニー 1981)。

実際の接触場面におけるインターアクション問題やコミュニケーション・ストラテジーについて、ネウストプニー(1985, 1994, 1995, 1997)、尾崎(1993)、Fan(1998, 2006, 2010)、村岡(2002, 2006, 2010)、宮崎(2002)、Fairbrother(2002)、加藤(2006, 2010)、方(2007)、施(2011)のような研究が挙げられる。しかし、これまでに言語管理理論(Language Management Theory)(Neustupný 1985a, 1994b, ネウストプニー1995, 1997)の視点による中国における日本語学習者のインターアクション問題についての研究はあまり多くない。また、インターアクション問題の類型と調整ストラテジーの関連性についての研究もまだ少ない。

本稿では、言語管理理論の管理プロセスのモデルを枠組みとして取り入れて、日中接触場面の会話データを分析し、中国人日本語学習者のインターアクション問題と調整ストラテジーの実態を明らかにする。主に会話調査の方法で日中接触場面の自然会話データを収集し、中国人

日本語学習者の逸脱が起こった、あるいは起こりうると予測される会話例を中心に考察するが、具体的には、以下の問題点を解明しようとしている。

(1)言語管理プロセスの逸脱段階において、どんな規範からの逸脱が生じたかを分析することによって、インターアクション問題が言語行動レベル、コミュニケーション行動レベル、文化行動レベルのどれに属するかを究明する。

(2)言語管理プロセスの調整計画段階において、どんな調整ストラテジーが話者に選ばれたかを考察する。

(3)インターアクション問題の種類と調整ストラテジーの使用との関わりを分析する。

2. 調査概要

2. 1 調査期間と会話設定

自然会話データを収集するために本調査は2013年6月から7月まで行われ、日本語を使用言語とした日中接触場面の会話を3組収集した。各会話は中国人日本語学習者と日本人母語話者のペアの調査協力者からなり、一組に約20分間の会話をしてもらった。コミュニケーションにおけるインターアクション問題と調整ストラテジーの使用のバラエティーをできるだけ多く考察するために、話題を指定せず、自由会話をしてもらった。画像と音声を収録するのに撮影機能付きのデジタルカメラとICレコーダーを使用した。録音録画機材は目立たないところにおかれたため、協力者から会話時にあまり気にならなかったと、収録直後に報告された。

2. 2 協力者プロフィール

会話調査の協力者は日本語母語話者(以下Jと略す)1名と中国人日本語学習者(以下Cと略す)3名からなっている。次の表1は各協力者のプロフィールを示している。

表1：接触場面会話の調査協力者のプロフィール

番号	協力者	母語	年齢	性別	日本語学習歴	会話時間	関係
会話1	C1	中国語	20歳~25歳	女	3年(上級)	20分30秒	友達
	J1	日本語	20歳~25歳	男	-		
会話2	C2	中国語	20歳~25歳	女	2年(中級)	22分20秒	友達
	J1						
会話3	C3	中国語	20歳~25歳	女	2年(中級)	21分17秒	知り合い
	J1						

3名の中国人協力者の日本語能力はそれぞれ異なるが、3人ともA大学の日本語専攻の学生である。調査実施の時点で3人ともまだ日本語能力試験を受けていないため、日本語学習歴によってレベルを推測した。C1は学部3年間の学習を終えて上級レベルに相当し、C2、C3は学部2年間の学習を終えて中級レベルに相当する。また、3人ともは成績が優秀で調査実施時(2013年7月)より約2ヶ月後の9月には在籍の大学より日本の大学に交換留学生として、1年間留学することが決まっていた。本稿ではCの日本語能力がインターアクション問題と調整ストラテジーに関係するかどうかを考察するため、3名の中国人協力者にそれぞれ同じ日本人協力者(J1)と会話をしてもらった。J1は日本のあるB大学からCの在籍するA大学に1年間留学に来ている学部生で、調査実施時にちょうど留学期間が終了して、9月に日本に帰国する予定だった。JとCの関係は、C1>C2>C3の順に親しい。Jは留学期間中、C1とC2との付き合いが多くて友達の関係であるが、C3とはそれほど親しくなく、知り合い程度であることを、会話収録後4名の協力者にそれぞれ確認した。

2. 3 調査手順

まず、A大学の空き教室でカメラとICレコーダーを使って、各ペアの約20分間の会話を録音・録画した。収集したデータは音声・画像データである。会話調査の目的を事前に教えると、協力者が会話の時に日本語の使用を意識してしまい、不自然になる恐れがあることを考慮して、会話の前に、協力者に調査目的を教えなかった。それから、会話の後、筆者によってこれらの音声・画像データの文字化を行い、文字化された資料に現れたインターアクション問題を抽出した。これらの文字化資料を文字化データと呼ぶ。最後に、会話の収録から一週間のうちに、抽出されたインターアクション問題を中心に会話時の規範意識や使用した調整ストラテジーなどについて、協力者に1人ずつ音声・画像データと文字化データを見せながら、約1~2時間のフォローアップ・インタビュー(以下FUIと略する)(ネウストプニー1994, ファン2002)を行った。

本稿では、会話におけるインターアクション問題はどんな規範から逸脱が生じたか、それに対して話者がどんな調整ストラテジーを計画し、実施したかを考察するため、会話に現れた発話や行動のほかに、会話時の意識を知る必要もある。そこで、会話参加者の言語行動の裏付けや、聞き手の発話の受け取り方など内面的意識を記録できるFUIの方法を採用した。FUIを実施する時の具体的な流れは、ネウストプニー(1994)で挙げられた、(1)ウォーミング・アップ、(2)記録前の意識、(3)記録時の意識、(4)記録後の意識、(5)確認、という5つのステップに沿って行われた。

FUIの時、意思をより正確に確認するために、協力者の母語に応じて、中国人に中国語で、日本人に日本語でインタビューを行った。インタビューの内容も必要によって一部文字化した。これらのFUIデータと前述の音声・画像データ、文字化データをあわせて接触場面における中国人のインターアクション問題と調整ストラテジーの使用を考察する。

3. 分析の枠組み

3. 1 インターアクション問題の分類

ネウストプニー(1995a)は、接触場面の問題として、「言語行動の問題」「コミュニケーション行動の問題」「文化行動(実質行動)の問題」の3つをあげているが、「言語行動の問題」とは、文法、語彙、発音といったいわゆる言語の問題であり、「コミュニケーション行動の問題」とは、その言語をいかに使用するかという段階の問題であり、「文化行動(実質行動)の問題」とは、社会・文化行動のルールを利用してインターアクションを行う段階の問題であるとしている。そして、日本語教育の最終的な目標は、「文化・社会(実質)行動であるインターアクション」に設定すべきであり、そのためにもそれぞれの段階における問題の分析が重要であるとしている。これを参考に、本稿では接触場面におけるCのインターアクションに生じた問題を下記のように分類する。

1)言語行動の問題(言語的問題): 文法、語彙、発音、表記、文の構造などに関する問題である。たとえば、例1では、C2が言った「きっていない」は「行っていない」の動詞「行く」の誤用である。これが文法上の問題である。

例1:

- 245 J1 あどこでもいいんだ、
246 C2 はい、わたしはどこでも、きっていないから、

2)コミュニケーション行動の問題(社会言語的問題)：だれが、どこで、何を、どう言うか、などに関する問題。ネウストプニー(1995a)は D・ハイムズの SPEAKING モデル(Hymes 1972)をもとに、社会言語のルールを、「点火」、「セッティング」、「参加者」、「バラエティー」、「内容」、「形」、「媒体」、「操作」の8つに分類した。本稿ではこれらのルールから逸脱して生じた問題を本カテゴリーに入れる。たとえば、例2では、J1の普通体「お久しぶり」に対して、C3は敬体の「お久しぶりです」と応答した。FUIでは、J1の普通体の使用に違和感を感じ、普段の付き合いでJ1とそれほど親しくないと思ったので、「です」を使用した、とC3が報告した。これは会話参加者の関係の捉え方から生じたコミュニケーション行動の問題である。

例2：

- 1 J1 おひさしぶり、
- 2 C3 あーおひさしぶりです、

3)文化行動(実質行動)の問題(社会文化的問題)：言語行動とコミュニケーション行動以外の、日常生活の「食べる」・「物を作る」などの行動や、政治・経済・思考などの社会・文化行動に関する問題である。たとえば、例3では、C3はJに個人の稼いだお金について質問しているが、これは日本の規範から逸脱した文化行動に関わる問題である。

例3：

- 272 C3 え、私たちは、ナカヤマさんは日本で、ただ、いち、いちけがつしかアルバイトしませんでしたが、え、中国での一年の学費を自分で全部はら、払います、と、(うん)え聞きました、それは～～本当ですか↑～～

3. 2 言語管理プロセスのモデル

ネウストプニー(1995)によると、言語問題は、「管理プロセス」の形を取り、「管理プロセス」が期待(規範)からの逸脱から始まると思われ、管理プロセスのもっとも簡単な形は、1)規範(norm)からの逸脱(deviation)から始まり(逸脱段階)、2)それが留意(note)され(留意段階)、3)留意された逸脱が評価(evaluation)され(評価段階)、4)評価された逸脱の調整(adjustment)のための手続きが選ばれ(調整計画段階)、5)その手続きが遂行(implementatation)される(調整遂行段階)、という図1のような構造になると提案された。

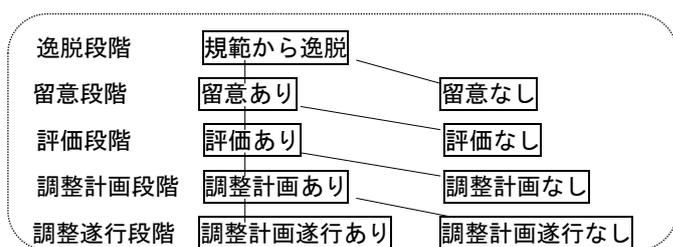


図1：言語管理プロセスのモデル (Neustupý1985a, 1994b, ネウストプニー1995, 1997)

言語管理理論は、非母語話者を含むインターアクション場面において、単に生成的に実現される行動だけではなく、規範や期待からの逸脱から始まる管理の諸過程が頻繁に行われていることにも焦点をあわせているため、本稿ではこの言語管理理論の管理プロセスのモデルを分析の枠組みに取り入れることにした。特に逸脱段階と調整計画段階に絞ってインターアクション問題の類型と調整ストラテジーの使用実態を考察する。

3. 3 接触場面における規範の分類

言語管理理論では、規範とはある特定のコミュニケーション場面において、会話の参加者によって正しいルールであると判断されるものの基準であり、さまざま社会や状況の違いによって規範は変化するものであるとしている。また、接触場面における一般的な規範選択のストラテジーとしては、もし A という言語がその場で使用されれば、A の母語場面での規範が基底規範となるとしている。さらに、規範とは必ずしも言語的側面のみを指すのではなく、社会言語的、社会文化的側面を含むものである(Neustupý1985)。つまり、言語的規範、社会言語的規範、社会文化的規範があると理解できる。また、加藤(2006)はこれを基に、接触場面の非母語話者側が持つ規範を、母語規範、目標言語規範、他言語規範、個人規範、共有規範、接触場面規範に分類した。

従って、本稿では、インターアクション問題を分類する際、まず、言語管理プロセスの逸脱段階で上記の言語的規範、社会言語的規範、社会文化的規範のどれから逸脱して問題が生じたか分析する。それから、加藤(2006)の分類を用いてこれらの規範が母語規範か目標言語規範のどちらであるかを検討する。

3. 4 接触場面における調整ストラテジーの分類

ファン(1998)は、母語話者 NS と非母語話者 NNS の相手言語接触場面の参加者間の役割について、「主として言語能力に基づき」、「ホスト-ゲストの形態を取る」が、「このような両者の関係は、また自己選択と他者選択によって確立される」と述べており、さらに参加者の会話参加調整ストラテジーを表 2 と表 3 の下位分類にまとめている。

表 2：言語ホスト(NS)の参加調整ストラテジーの分類(ファン 1998)

言語ホストの自己参加の調整	言語ホストの他者参加の調整
1. 参加増進ストラテジー	3. 参加要請ストラテジー
a. 発話量を増やす b. 相手の身近な話題を提供する c. 話題の発展をコントロール	a. 同じ質問を複数の参加者に聞く b. 修辭的な質問をする c. 静かな参加者にターンを与える d. 話題の選択権を譲る e. 依頼する
2. 参加緩和ストラテジー	4. 参加支援ストラテジー
a. Simplified register b. ゆっくり話す c. あいづちのポーズを入れる d. キーワードを強調する e. 自分の発話を繰り返す f. 自分の発話をパラフレーズする g. 例を与える h. 英語にスイッチ i. 文脈をはっきりさせる j. 丁寧に話す k. 発話量を控える	a. 誉める b. 同情する c. あいづち詞を多用する d. 肯定的なフィードバックを多用する e. ノンバーバルのあいづちを多用する f. 相手の発話を続けて完成させる g. 相手の発話を繰り返す h. 相手の発話をパラフレーズする i. 相手の発話を確認する j. 相手の発話を要約する k. 相手の発話を待つ l. 曖昧さを許容する

	<ul style="list-style-type: none"> m. 誤用を許容する n. 不意の話題変更を受け入れる
--	--

表 3 : 言語ゲスト (NNS) の参加調整ストラテジーの分類 (ファン 1998)

言語ゲストの自己参加の調整	言語ゲストの他者参加の調整
1. 参加回避ストラテジー	3. 支援懇請ストラテジー
<ul style="list-style-type: none"> a. 音声的な縮小 b. 意味論的な縮小 c. 文法的な縮小 d. 語彙の簡略 e. 話題全体の回避 f. メッセージの縮小 	<ul style="list-style-type: none"> a. 言語行動で助けを求める b. 非言語行動で助けを求める c. 周辺言語で(音調など)訴える d. ためらう
2. 参加達成ストラテジー	4. 参加譲渡ストラテジー
<ul style="list-style-type: none"> a. コードスイッチング b. 外国語化 c. 直接翻訳 d. 言語間の転移 e. 類似語の使用 f. パラフレーズ g. 造語 h. 迂回表現の使用 i. 質問をする 	<ul style="list-style-type: none"> a. お詫びをする b. 接触言語の難しさを強調する c. 相手の会話支配を認める d. 渡された話題を放棄する e. 最小限の応答

本稿では、主に表 3 を参考にして、さらに調整計画があるかどうか、ある場合は適切な表現に調整できるかどうかによって、以下の図 2 の分類を用いて、言語ゲストとしての C が使用した調整ストラテジー(1~5 タイプ)を分析する。図 2 で示したように、逸脱段階で規範から逸脱がある場合、その逸脱について、話者の反応は「調整計画あり」と「調整計画なし」に二分できる。さらに、調整計画の段階で、「調整計画あり」の場合、話者のインターアクション能力によって、自力で「適切な表現に調整できる」と「適切な表現に調整できない」という二つの状況になる。「適切な表現に調整できる」場合は、1 言い直す調整ストラテジー¹が選ばれ、調整遂行段階で適切な表現に言い直す調整が遂行される。「適切な表現に調整できない」場合は、表 3 の各種の調整ストラテジー(2 参加回避, 3 参加達成, 4 支援懇請, 5 参加譲渡)が使用される。一方、調整計画の段階で「調整計画なし」の場合は、逸脱に対して「6 調整ストラテジーなし」という状況となる。このタイプも本稿の考察対象に入れる。

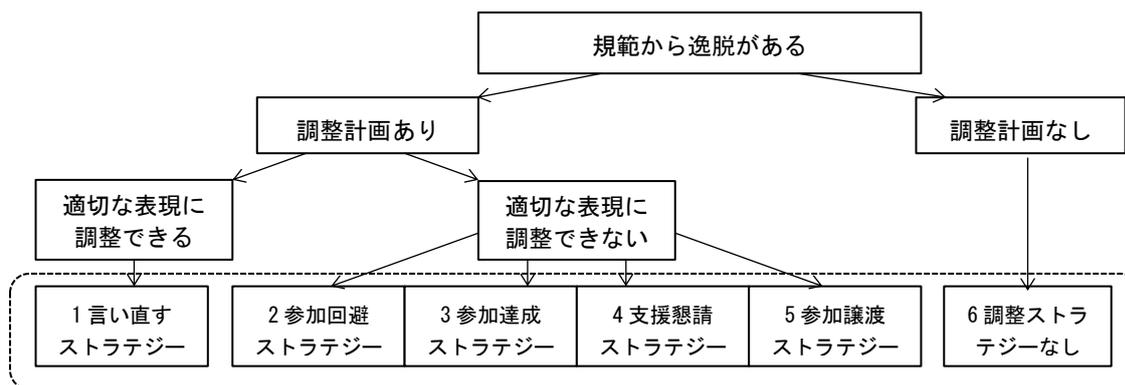


図2：接触場面におけるCの調整ストラテジーの分類

3. 5 会話例の分析手順

本稿では、まず FUI データと合わせて、会話データから、逸脱があり、言語管理が確認できた会話例を抽出してインターアクション問題がある例として、管理プロセスの逸脱段階でどんな規範から逸脱が起こったか、あるいは起こりうると留意されたかを分析する。それから、管理プロセスの調整計画段階では調整計画があるかどうか、ある場合はどんな調整ストラテジーが選ばれたかを分析する。最後に、全体像を把握したうえで、インターアクション問題の類型と選ばれた調整ストラテジーの使用がどう関わっているかを検討する。たとえば、例4の発話20を見てみよう。

例4：(ペア2)(Cの留学の日程)

- 17 J1 どの空港↑
 18 C2 えっ↑
 19 J1 どの空港↑
 20 C2 えー、なりなり↑
 21 J1 なりた、
 22 C2 なりた、なりた空港、
 23 J1 あらあらあら、

この会話では、C2は9月に日本に留学に行くと話したら、J1はどの空港から入国するかと聞いた。しかし、C2は空港の名前の日本語を忘れたので、上がり音調で「なり↑」と発話して母語話者のJ1に助けを求めた。そしたら、J1は正しい言い方を言い続けた。管理プロセスのモデルで見ると、以下となる。

逸脱段階：FUIではCは「日本語『成田空港』の言い方をはっきり覚えていない」と報告した。

つまり、ここでは、目標言語(日本語)の語彙の規範から逸脱が起こった。

留意段階：Cに留意された。

評価段階：FUIで「Jの問題に答えられない、話が続けられない」という報告があった。

調整計画段階：「語尾音の上昇でJに正しい言い方を求めよう」という支援懇請調整ストラテジーが選ばれた。

調整遂行段階：「なり↑」と発話された。

以上の分析をまとめると、この例は言語行動問題に属し、支援懇請ストラテジー(音調などの周辺言語で訴える)という調整ストラテジーが選ばれた例である。本稿では、以上のような手順で各例を分析し分類した。

4. 考察と分析

4. 1 インターアクション問題の分布

まず、接触場面におけるCのインターアクション問題の分布を話者別に表4にまとめた。合計数から見ると、言語行動問題は54件あり、最も多かった。それに次いで文化行動問題が11件観察されたが、最も少なかったのはコミュニケーション行動問題で、6件しかなかった。話者の言語レベルと合わせてみると、言語行動問題のうちに、上級レベルのC1は2件しかないのに対して、中級レベルのC2とC3はそれぞれ29件と23件で数多かった。コミュニケーション行動問題の場合は、話者の言語レベルとあまり関係せず、3人とも少なかったが、C1のほうはやはり一番数少なかった。しかし、文化行動問題の場合は、C1はC2よりも多く観察された。つまり、言語行動問題のレベルでは、問題発生と話者の日本語言語能力と著しく関係することが考えられる。レベルが低いほど問題発生の確率が高くなるといえよう。一方、コミュニケーション行動問題と文化行動問題のレベルでは、問題発生の確率は話者の日本語言語能力の高さと著しい関係がないと考えられる。

表4：インターアクション問題の分布(単位：件)

インターアクション問題	話者			合計
	C1	C2	C3	
言語行動問題	2	29	23	54(76.0%)
コミュニケーション行動問題	1	2	3	6(8.5%)
文化行動問題	3	1	7	11(15.5%)
合計	6	32	33	71(100%)

次の各小節で、以上の各インターアクション問題が生じた会話例を詳しく分析していく。

4. 1. 1 言語行動問題

本稿で観察された言語的規範から逸脱した言語行動問題の会話例は最も多く、54件ある。そのうち、語彙と文法規範からの例が最も多かった。たとえば、例5の発話274では、日本語の文法規範から逸脱が生じたと考えられる。

例5：(ペア2)(Cの日本での勉強)

- 270 C2 これからは、しょうがく、奨学金がもらえと思ったんだけど、もらえなかった、
- 271 J1 え↑なんで↑
- 272 C2 えーメールによると、今年の、しんせいと、厳しくなって、〇〇大、学のJ-PACのプ Program
はまだとおっていないらしいです、
- 273 J1 あー
- 274 C2 それから、今年の奨学金はない、と思ったほうがいい、って～
- 275 J1 あー(//ーー)
- 276 C2 (//大変～)やっぱ大変ですね、
- 277 J1 いや大変ですね、

C2は留学の奨学金をもらえなくなり、この会話ではその経緯をJ1に説明している。発話274の「って」について、C2は「『って書いてあります』を言いたかったが、『てある』の使用に自信がない」、「間違いかもしれない」とFUIで報告した。つまり、目標言語(日本語)の文法の規範から逸脱しようと話者に留意された。そのため、C2は「てある」文型の使用を放棄して、「って」のみで発話を終えている。

例 6 : (ペア 3)(C の日本での勉強)

- 44 C3 あーもし、チャンスがあれば、えはくしゅうこていが、日本で、勉強したいです、
 45 J1 はかせかてい↑
 46 C3 あはい、

FUIによると、例 6 の発話 44 のところで、C3 は「博士課程」と発話したかったが、「博士」の単語に「はかせ」と「はくし」の二つの発音があることを覚えているが、正しい発音をはっきり覚えていなくて、「はくしゅう」と発音してしまった。これは日本語の語彙の規範からの逸脱となる。

例 7 : (ペア 1)(J のこれからの計画)

- 363 J1 ね、やることたくさんよ日本に帰っても、
 364 C1 うん、あと、あの、どんな仕事したい↑
 365 J1 どうだろうね、

例 7 の会話では、発話 363 までに J1 の卒業論文のデータについて話していたが、発話 364 で C1 はこの話題についてもう話したいことがないと考え、「どんな仕事したい」と話題転換した。しかし、FUIによると、これについて C1 は、「話したら、すぐ話題転換の時『ところで』を言い忘れたことに気付いた。J1 にとってちょっと突然の感じがしたでしょう」と留意し、マイナス評価をした。また、「中国語なら『ところで』を言わないが」と説明したうえ、「やはり接続詞の使用に気をつけなければならない」と日本語の接続詞使用への管理を示した。つまり、この例で、C1 は中国語の規範ではなく、日本語の語彙の規範を基準に逸脱に留意したことがわかる。

以上のような例のほかにも、言語能力で相手 J1 の発話を聞き取れないことや、聞いても意味がわからないことが理由で、応答を最低限にしてごまかす例も C2 と C3 の会話で観察された。例 8 はその一例である。

例 8 : (ペア 3)(C の日本での勉強)

- 53 J1 こういうことなんか、(うん)えー、え日本にいる間は日本語を勉強しつつ、
 54 C3 あはい、
 55 J1 日本語を勉強して、教育学も勉強する、
 56 C3 あはい、
 57 J1 ていう感じ、
 58 C3 あ、(・・)あ、

発話 53 の文型「つつ」の意味がわからないので、C2 は発話 54 で「はい」だけで最小限の応答をした。FUIでは、C2 は、「つつ」の意味がわからないが、J1 の話を中断させて確認するのはよくないので、「はい」だけで応答して、分かったふりをしようとした、と説明した。

全体的に見ると、C の言語行動問題では、語彙、文法の面において逸脱が生じやすい。例えば、語彙(はくしゅう→はかせ、いっこうき→一学期、いちげがつ→一ヶ月)、音声(ときょう(アクセント①)→東京(アクセント②))、動詞活用形(戻っから→戻ってから)、テンス(行く後→行った後)、文型(「である」の不使用、「つつ」の未習得、ないでもいい→なくてもいい)、話題転換の際や一人で長く語る時の接続詞の使用(「ところで」「それで」の欠落)などがある。FUIでも、「単語を覚えていない」、「文型の意味がわからない」、「接続詞がなくて不自然」、「J の言ったセンテンスがわからない」という報告が多かった。ただし、一つの共通点として、以上の逸脱のどれも、目標言語(日本語)規範からのものである。つまり、日中接触場面の会話における

非母語話者の C のほうは言語行動に関して、できるだけ目標言語(日本語)の規範に沿って管理しているといえよう。

4. 1. 2 コミュニケーション行動問題

コミュニケーション行動問題の例は最も少なく、全部で 6 件しか観察されなかった。このうちの 3 件は敬語の使用に関わっている。たとえば、例 9 の発話 234 では、C3 は簡体の「見ている」を発話したあと、「J1 とは親しくないので、親しくない人には敬語を使ったほうがいい」と J1 との関係を考慮して、敬体の「見えています」に言い直した。つまり、ここでは前の例 2 と同じように「参加者」に関する逸脱が起こっており、しかも話者は日本語の敬語の使用規範(親しくない人に敬語を使う)を基準に逸脱を判断しているのである。

例 9 : (ペア 3)(普段の余暇生活)

- 230 C3 え、ナカヤマさんは、
 231 J1 うん、
 232 C3 え下妻物語という映画を見ましたか〜↑
 233 J1 えちょっと見たことがありますよ、はい、
 234 C3 は〜い、わたしは今日はこの映画を見ている、見えています、
 235 J1 あーえん、

例 10 のように「内容」の規範から逸脱が起こったと考えられる例は 2 件ある。発 103, 105, 107, 109 では、J1 は「どうぞよろしくお願いします」「ありがとうございます」を何回も繰り返して言い続けた。これに対して、C3 は発話 104 で普通に「よろしくお願いします」と応答したが、発話 106 では別の言葉に変えた。そして「ありがとうございます」と 3 回目の「よろしくお願いします」と言われた時、どう返事したらいいかわからなくなり、発話 108 と発話 110 で非言語行動の笑いや最小限の「はい」だけで対応した。FUI では、C3 は「J1 が何度もよろしくやありがとうを言ってくれて、とても親切なので、自分がどんな適切な返事したらいいかわからなくなった」、「中国ならこのやり取りはたぶん一回二回で終わるから」と報告した。ここで働いたのは C の中国語母語規範であろう。

例 10 : (ペア 3)(C の日本での生活)

- 102 C3 じゃー、わたしはコウさんと〇〇大学に行く後も、え〜ナカヤマさんと一緒に会話をしましょ
 うか〜
 103 J1 はいよろしくお願いします〜ほんとに、
 104 C3 よろしくお願いします、
 105 J1 どうぞ、どうぞよろしくお願いします、
 106 C3 私たちも、(はい)とても、楽しいです、
 107 J1 はい、ありがとうございます、
 108 C3 〜
 109 J1 ほんとうにどうぞよろしくお願いします、
 110 C3 〜はい〜
 111 J1 xxのことよろしく〜
 112 C3 〜はい〜えー(うん)ナカヤマさんはどんなきっかけに中国語、え、え、中国に来ますか↑

次の例 11 は「バラエティー」の規範から逸脱した例である。J1 は発話 305 で「どうぞよろしくお願いします」と真面目そうに発話したので、C2 も発話 306, 308 でフォーマルな口調で

返答した。FUI では、C2 は『こちらこそよろしく願います』の決まり文句はやや正式な言い方で、実はこの場にふさわしくない。J1 とはあまり敬語で喋らない。ちょっとからかう感じで笑いながら言ったのだ」と報告し、「普段も J1 と話すときはあまり敬語を使わなかったりしているが、時にはあえて正式な口調で話したらちょっと冗談が入っている」と説明を付け加えた。つまり、ここでは、話者は個人規範と「バラエティー」のルールから「場にふさわしくない」という逸脱が起こったと判断したと考えられる。

例 11 : (ペア 2)(C の日本での生活)

- 305 J1 そうか、あー、てかさ、日本に来たら中国語の先生としてどうぞよろしく願います、
 306 C2 ～いえいえこちらこそ～
 307 J1 へへ～
 308 C2 よろしく願います～

コミュニケーション行動問題の例は少なかったが、逸脱の判断基準とされた規範には「内容」「参加者」「バラエティー」の3種類が見られた。しかも言語行動問題の場合と違って、日本語規範だけでなく、母語(中国語)規範や個人規範からの逸脱も観察された。

4. 1. 3 文化行動問題

文化行動問題の例は全部で 11 件観察されたが、それぞれ目標言語(日本語)規範、個人規範から逸脱が生じたものである。

たとえば、次の例 12(例 3 と同例)では、C3 は J に個人の稼いだお金について聞いてしまった。これは日本の文化行動規範から逸脱したインターアクション問題である。

例 12 : (ペア 3)(J の留学生活)

- 270 C3 え、え、え、あの、(あ)うんーナカヤマさんは、えー、〇〇に、来たばかりの時、
 271 J1 うん、
 272 C3 え、私たちは、ナカヤマさんは日本で、ただ、いち、いちけがつしかアルバイトしません
でしたが、え、中国での一年の学費を自分で全部はら、払います、と、(うん)え聞きました、
それは～～本当ですか↑～～
 273 J1 あ、あー、えと、つまりなんですか、えーと、(～)中国の学費を、
 274 C3 あはい、
 275 J1 一ヶ月で、
 276 C3 あはい、
 277 J1 日本で一ヶ月のバイトで、稼ぐってことですかね、
 278 C3 あそうなんですね、
 279 J1 あでも、(・・)あ、可能だと、思いますけど、ああの夏にまた僕バイトやっていて、
 280 C3 あはい、
 281 J1 そのときは2ヶ月で結構な額を稼いだので、かなり、(・・)
 282 C3 あー
 283 J1 お金を稼いだので、たぶん学費ぐらいはなりましたね、
 284 C3 あーはい～そうですか～

C3は、「J1が自費で中国に一年間留学してきたが、その一年間の学費を日本で1ヶ月だけアルバイトして稼いだというわさを普段聞いたことがあるが、中国では想像できない」ので、この場でその真実さを本人に確かめていた。しかし、発話272で話している途中で、「日本人にとって金銭面のプライベートのことにについて聞くのが失礼なことである」のに気付いた。それで、笑いながら発話を終えた。これについてC3は「笑うことでごまかして、雰囲気緩和しようと思った」とFUIで説明している。J1の反応から見ると、このようなプライベートのことを直接に聞かれてすぐに「はい」か「いいえ」とはっきり答えられず、慎重に質問を確認してから、答えを考えながら長く説明した。FUIでは、「ちょっと意外だった」とJ1は報告している。

次の例13(例3と同例)では、C3は日本人先生の中国語レベルを評価した。これも日本の文化行動規範から逸脱したインターアクション問題である。

例13：(ペア2)(Jの日本での中国語先生)

- 151 J1 サカイ先生、サカイ先生が、
 152 C2 さかいせんせい、
 153 J1 えー史学科の、かんちょうで、中国語も教えていらっしゃる、
 154 C2 あ中国語、
 155 J1 ぼくの中国語の先生～
 156 C2 あーー中国語の先生↑
 157 J1 うん、
 158 C2 じゃ中国語が～うまいです～たぶん、
 159 J1 えっ↑
 160 C2 (・・3)
 161 J1 そっか、えーー一年、一年のもんね、(//留学が)

J1は日本にいた時の中国語の教師「サカイ先生」についてC2に話したが、C2は「あの先生の中国語はきっと上手だから史学科の先生でありながら中国語も教えられるのでしょうか」とFUIで会話時の意識を述べた。それで、その先生の語学力への感心を表すために、発話158で「中国語がうまいでしょうね」と発話したかった。しかし、言っている途中「日本では先生に対して評価してはだめだ」と気づき、笑いながら話を急いで中止した。これについて、J1は「えっ↑」と驚きを示した。しかし、C2は発話160で沈黙して、それ以上発話するのをやめた。それで、J1もC2の評価に回答せず、発話161でそのまま話題転換をした。

次の例14では、話者C3はJ1の「歴史の勉強」の話題に興味を持っていなかったため、話を続けたくなく、発話200で「はい」だけで最小限の応答をした。しかし「Jの話題に反応しなくて失礼になったね」と反省して、発話202でJ1が前に一度話していた話題に転換する調整ストラテジーを遂行した。ここでは、「話題に積極的に参加しないと失礼になる」というC3の個人規範から文化行動問題が起こったと考えられる。この例のような話題の継続や転換に関する文化行動問題は3件観察された。

例14：(ペア3)(Cの日本での留学)

- 195 J1 そうか、じゃ日本で、じゃ歴史とかも勉強するんですか日本にいったら、
 196 C3 あー
 197 J1 もし機会があれば、
 198 C3 うん～～
 199 J1 勉強する機会ですね、
 200 C3 はい～

- 201 J1 あーそかそか,
 202 C3 うんーナカヤマさんは,
 203 J1 はい,
 204 C3 さっき中国の観光地は(うん)日本にありませんと(うん), え思いますが(うん), わたしは日本の環境は, xxえーきれいだと思います,

他に, 「もの」「遠い」「酔い」「チューター」などの言葉へのメタ認知の日中差異から, 逸脱が起こった文化行動問題の例は5件もあった。たとえば, 次の例15では, C3とJ1は「もの」という概念についてずれがある。J1は「中国のもの」というのはあまりに抽象的で大きい質問で, 答えにくいと思ったのに対して, C3は「中国語で普通にどんな『東西(日本語訳:物)』が好きですかと聞くと, 大きい質問とは思わない」と思ったが, 「Jの反応が大きかったので, 笑いながらごまかした」と発話156で調整した。

例15: (ペア3)(Cの日本での留学)

- 152 C3 では, 一番好きな, え中国のものは, なんですか↑
 153 J1 中国の,》もの《↑
 154 C3 ~ーあー
 155 J1 あーでかいーですね, 問題が, (〜)大きいですね, 問題が〜
 156 C3 ~ー

例16では, C3は中国の大学の日本語専攻の学生向けの「大学日本語四級試験」というテストに向けて準備していることを話しているが, このテストは中国特有のもので, 日本にはない。それで, 「大学日本語四級試験」と言ったらJ1がわからないかもしれないので, 日本にある日本語能力試験一級の名称を見本に「日本語能力四級」の新しい名称を造語した。

例16: (ペア3)(Cの最近の状況)

- 5 J1 最近はどうですか↑
 6 C3 あ, 最近~, 最近は, ずっと, 日本語, 能力, 四級の, (うん)テストに準備していますが,
 7 J1 //あー
 8 C3 たいへんですね~

以上インターアクション問題について類型別に分析してきたが, 次の節では調整計画段階で話者が使用した調整ストラテジーについて考察する。

4. 2 調整ストラテジーの分布

表5は接触場面における, Cが使用した調整ストラテジーの分布を問題別と話者別にまとめたものである。

表5: Cが使用した調整ストラテジーの分布(単位: 件)

調整ストラテジー		言語行動問題			コミュニケーション行動問題			文化行動問題			合計
		C1	C2	C3	C1	C2	C3	C1	C2	C3	
自己	言い直すストラテジー	-	3	4	-	-	1	-	-	-	8
自己	参加回避ストラテジー	-	3	2	-	-	-	-	-	1	6

参加	参加達成ストラテジー	-	4	4	-	-	-	2	-	1	11
他者	支援懇請ストラテジー	1	7	4	-	-	-	-	-	3	15
参加	参加譲渡ストラテジー	-	5	3	-	-	1	-	1	2	12
調整ストラテジーなし		1	5	6	-	1	-	-	-	-	13
その他		-	2	-	1	1	1	1	-	-	6
合計		2	29	23	1	2	3	3	1	7	71

合計数から見ると、言語管理が確認できた全部 71 例のうち、言い直すストラテジーの例は 8 で、調整ストラテジーなしの例は 13 件であった。自己参加と他者参加の各ストラテジーの例が最も多く、44 件観察された。そのほかのストラテジーが使用された例は 6 件あった。調整ストラテジーの使用と、インターアクション問題の種類と、話者の日本語能力との関係については、後節 4. 3 で分析することにする。

次の各節で、表 5 に合わせてこれらの各パターンの調整ストラテジーを考察していく。

4. 2. 1 言い直すストラテジー

このパターンの用例は 8 件あり、主に C2 と C3 の言語行動問題の例に集中しているが、C3 のコミュニケーション問題の例に 1 件観察された。たとえば、例 17 では、発話 144 で人間の「スター」に動詞「ある」を使用した。この日本語文法規範からの逸脱が話者に留意され、調整ストラテジーとして、適切な表現となる人間・動物の存在を表す動詞「いる」に言い直された。

例 17(ペア 3)(J の余暇生活)

- 144 C3 (・・)好きな中国のスターがありますか↑～
 145 J1 スターか、
 146 C3 あ、いますか↑～
 147 J1 ～スターか、スターか～あんまり僕はテレビ見ないんで、(//あれなんですけど、

4. 2. 2 参加回避ストラテジー

このパターンの用例は 6 件あり、主に C2 と C3 の言語行動問題の例に集中しているが、C3 の文化行動問題の例に 1 件観察された。下位分類として、表 3 の 1a, 1c, 1d, 1e, 1f の調整ストラテジーの使用例がある。たとえば、例 18 では、C2 が日本への安い航空券を購入したのを聞いて、J1 はどうやって探したかと訊ねている。それに対して、発話 40 で C2 は、アメリカの「デルタ」航空会社が安いという情報を教えたかったが、航空会話の名称の日本語「デルタ」がわからなくて、結局その名称を言うのを諦めている。つまり、話者がメッセージ縮小(1f)のストラテジーを使用したと思われる。

例 18 : (ペア 2)(日本に渡航の航空券の購入)

- 39 J1 どうやって探したんですか↑それ、
 40 C2 アメリカの、アメリカの、
 41 J1 たいと↑
 42 C2 え、もっとも安い、飛行機で、
 43 J1 はー

4. 2. 3 参加達成ストラテジー

このパターンの用例は 11 件あり, C1, C2, C3 の言語行動問題と文化行動問題の例に見られる. 下位分類として, 表 3 の 2d, 2e, 2f, 2g, 2h, 2i の調整ストラテジーが使用された.

例 19 : (ペア 3)(C の最近の状況)

- 5 J1 最近はどうですか↑
6 C3 あ, 最近~, 最近は, ずっと, 日本語, 能力, 四級の, (うん)テストに準備していますが,

たとえば, 例 19(例 16 と同例)では, C3 は中国の特有の大学日本語専攻の学生向けの「大学日本語専攻四級試験」を言うつもりだったが, J1 がわからないかもしれないので, 日本にある「日本語能力試験・一級」の名称を見本に「日本語能力四級」の新しい名称を発話している. この例では, 2g「造語」の調整ストラテジーが使用されたと考えられる.

4. 2. 4 支援懇請ストラテジー

このパターンの用例は 15 件あり, 3 人の, 特に C2, C3 の言語行動問題の場合に最も多く観察された. また, C3 の文化行動問題の例にも 3 件あった. 下位分類として, 表 3 の 3a, 3b, 3c, 3d のストラテジーが全て使用された. 次の例 20(例 4 と同例)はこのパターンのものである.

例 20 : (ペア 2)(C の留学の日程)

- 19 J1 どの空港↑
20 C2 えー, なーなり↑
21 J1 なりた,
22 C2 なりた, なりた空港,

この例では, C2 は成田空港の日本語の言い方を忘れたため, 語尾音の上昇で J1 に正しい言い方を求めて, 「なり↑」と発話した. つまり, 支援懇請ストラテジーの「周辺言語(音調など)で訴える」という調整ストラテジーが話者に選ばれたと考えられる.

4. 2. 5 参加譲渡ストラテジー

このパターンの用例は 12 件あり, C2, C3 の各インターアクション問題の例に見られる. 下位分類として, 表 3 の 4d, 4e のストラテジーだけに集中している. 次の例 21 はこのパターンのものである.

例 21(ペア 1)(C の日本での留学生活)

- 405 J1 うんうんうん, そぜひぜひ, うんぜひぜひ COMEON むしろ自分が留学生を歓迎するサークル,
406 C2 あはは~
407 J1 留学生を歓迎するサークルだから, たぶん留学生がはいるなんかあれなんじゃない↑
408 C2 はい,
409 J1 留学生同士で歓迎する, まそれは一つなんだけど~ほかにはたとえば, えーと外国人が参加するサークルもあるかな, そいう留学,

この会話で J1 は C2 が日本での留学期間中参加できるサークルについて, 熱心にアドバイスしていた. ここで C2 は J1 の発話 407 で言った内容が理解できていなかった. しかし「わから

ないと直接に言ったら会話の進みによくない」と考え、最小限の「はい」と応答して、わかったふりをしている。J1もC2がわからなかったことに気づかず、話を進めたとFUIで報告した。

また、前節で挙げられた例13もこれに同様の例である。例13の発話158で、C2はJ1の日本人の中国語先生の「中国語がうまい」と評価してしまって、日本の文化行動規範から逸脱した。それに対してJ1は発話159「えっ↑」と質問し、驚きを示した。しかしC2は自分の逸脱に留意し、この話題を続けないようにするため、発話160で沈黙して、話題を放棄したのである。

4. 2. 6 調整ストラテジーなし

このパターンの用例は12件あり、C2のコミュニケーション行動問題として敬語の不使用を調整しなかった1例のほかに、3人全員の言語行動問題の例に見られる。たとえば、例22(例1と同例)はこのパターンのものである。

例22：(ペア2)(日本での留学生活への予想)

- 245 J1 あどこでもいいんだ、
 246 C2 はい、わたしはどこでも、きっていないから、
 247 J1 そうだね、
 248 C2 ～～

C2が発話246で言った「きっていない」は「行っていない」の動詞「行く」の誤用である。しかし、この逸脱に対して、C2は調整をせず、「J1もわかったようだし、会話に影響がないようで、修正しなかった」とFUI報告した。他の用例の場合も、FUIでは、調整しなかった理由として「大きな問題ではない」「別に会話に支障がないから」「Jがわかったから」「あえて調整したら会話を中断させるかもしれない」などが挙げられた。

4. 2. 7 その他の調整ストラテジー

以上の各バラエティーの他に、以下のような調整ストラテジーの使用例が観察された。

例23：(ペア2)(Cの最近の状況)

- 103 J1 大丈夫だよ、
 104 C2 DAJIANGYOU,
 105 J1 あ、
 106 C2 DAJIANGYOUに～～
 107 J1 ～～～もう一個食べても、え、そかそかそか、えーじゃ、○○大が四人かな、院生二人と、学部生が、

例23では、言語ゲストのC2が言語ホストの参加緩和ストラテジーを使用している。C2は英語の試験があるが、J1の励ましに対して、どうせいい成績が取れないので、この試験は自分とは無関係のようなものだという意味を込めて、自嘲の口調で「DAJIANGYOU(打酱油)²」と発話した。しかし、「DAJIANGYOU」は中国ネット上の流行語なので、Jの中国語レベルからすればわかりにくい言葉かもしれないと考慮して、発話106でこの言葉を繰り返した。ここではC2の母語の単語となったので、全体の会話では言語ゲストのC2がこの単語のところに限って言語ホストとなり、言語ホストの調整ストラテジー使用の特徴を示したのではないかと考えられる。

例24：(ペア3)(Cの日本での生活)

111 J1 xxのことよろしく～

112 C3 ～はい～えー(うん)ナカヤマさんはどんなきっかけに中国語、え、え、中国に来ますか↑

例 24(例 10 と同例)では、複数の調整ストラテジーが同時に使用されている。例 10 において述べたが、FUI での報告によると、この会話では、J1 が「よろしくお願ひします」を何回も言っ
て、C3 は J1 があまりにも親切だと思っ、どう反応すればいいか分からなくなっと言っ
ている。しかし返事しないとよくないと思っ、笑うことでごまかしながら、最小限の応答をし
て、話題を転換する調整計画を立てて遂行した。つまり、1)参加懇請ストラテジー(非言語行動
で助けを求める)、2)参加譲渡ストラテジー(最小限の応答)、3)参加回避ストラテジー(話題全体
の回避)の複数の調整ストラテジーが使用されたと考えられる。

例 25 : (ペア 2)(C の最近の状況)

94 C2 あ、そうだ、うん、えーとにちがつ、にち一曜日の前は、(自分で紙に書きながら)

95 J1 うん、

96 C2 日曜日の前は、土曜日、土曜日、

97 J1 うん↑

98 C2 土曜日は、英語の試験があります、

例 25 では、言語行動とともに非言語行動で思い出すことを求める調整ストラテジーが使用さ
れた。C2 は「土曜日」の単語を忘れて、日本語の言語規範から逸脱が起こった。意思伝達に支
障がある(「話が続けられない」と FUI で報告)と考え、この言葉を思い出そうとした。そして、
C2 は「日曜日の前」と声を出しながら、紙に「日曜日」、「土曜日」と書いて思い出そうとし
たのである。最後に紙に書きながら土曜日の正しい言い方を思い出すのに成功し、意思伝達を果
たした。

4. 3 インターアクション問題と調整ストラテジーの相関性

以上インターアクション問題と調整ストラテジーへの分析から見てもわかるが、両者間に一
定の相関性が見られた。表 6 のデータで示したように、言語行動問題が起こった場合、54 件の
うち、<調整ストラテジーなし>のタイプが 22. 2%を占めて、つまり言語規範から逸脱が起
こったが調整されなかつた例は約二割である。これに対して、文化行動問題の場合は用例がな
かつた。また、言語行動問題の例のうち、逸脱があつても話者の自力で適切な表現に言い直せ
た<言い直すストラテジー>のタイプは 7 件あり、13%であつた。これに対して、文化行動問

表 6 : 問題別の調整ストラテジーの分布(単位 : 件)

問題		言語行動問題	コミュニケー ション行動問題	文化行動問題	合 計
調整ストラテジー					
言い直すストラテジー		7(13. 0%)	1(16. 7%)	-	8
自己参加	参加回避ストラテジー	5(9. 3%)	-	1(9. 1%)	6
	参加達成ストラテジー	8(14. 8%)	-	3(27. 3%)	11
他者参加	支援懇請ストラテジー	12(22. 2%)	-	3(27. 3%)	15
	参加譲渡ストラテジー	8(14. 8%)	1(16. 7%)	3(27. 3%)	12
調整ストラテジーなし		12(22. 2%)	1(16. 7%)	-	13
その他		2(3. 7%)	3(50. 0%)	1(9. 1%)	6
合計		54(100%)	6(100%)	11(100%)	71

題の場合は、例が観察されなかつた。つまり、中国人日本語学習者にとって、言語行動問

題が起こった場合は、量的には文化行動問題より多いが、調整されなくてもいいケースが多かった。また、話者が自分で訂正できる可能性も高い。しかし、文化行動問題が起こった場合は、量的には少ないが、起こった逸脱に対して全て調整が実施された。しかも、話者の自力で訂正するのが難しいと言える。言い換えれば、日中接触場面において、話者Cは言語行動問題より文化行動問題が会話にもたらした影響を重視しているのではないかと考えられる。しかも話者Cにとって、自力で文化行動問題を解決することは、言語行動問題を解決するより、難しいことが考えられる。

5. おわりに

以上の考察と分析によって、中日接触場面会話における中国人日本語学習者のインターアクション問題の種類と調整戦略の使用について次の結果が明らかになった。

まず、日中接触場面における中国人学習者側のインターアクション問題について、言語規範から逸脱した言語行動問題が主で、コミュニケーション行動問題と文化行動問題は比較的少ない傾向が見られた。さらに、言語行動問題の段階では、中国人学習者は全員日本語規範だけを用いたが、コミュニケーション行動問題と文化行動問題の段階では、日本語規範だけではなく、母語の中国語規範や話者の個人規範を逸脱の判断基準としていた。話者の日本語レベルとの関わりから見ると、日本語レベルが高いほど言語行動問題が少なくなるが、コミュニケーション行動問題と文化行動問題の場合は、日本語レベルの変化との相関性は示されなかった。したがって、日本語の言語能力の高い中国人学習者であっても、コミュニケーション行動能力と文化行動能力を高めることを常に心がけなければならないと提言することができよう。

次に、言語ゲストとしての中国人学習者側が使用した調整戦略について、バリエーションが多様であることがわかった。このうち、他者参加の調整戦略が自己参加の調整戦略より、やや多用である傾向が見られた。また、一つの逸脱に対して、一つの調整戦略が用いられる場合が多いが、複数の調整戦略が用いられた場合も観察された。そのほかに、言語ゲストのCは言語ホストの調整戦略を用いるケースも見られたが、接触場面において参加者の双方は動的に会話の主導権を持つことが考えられる。

最後に、インターアクション問題の種類と調整戦略との相関関係について考察したが、両者に一定の関連性が見られた。言語行動問題についての調整戦略のバリエーションが多いのに対して、文化行動問題の場合は自己参加と他者参加の調整戦略が多い特徴が見られた。また、言語行動問題は逸脱の発生が多いが、調整戦略が遂行されなかった場合が多かった。これに対して、コミュニケーション行動問題と文化行動問題の場合は逸脱が少く、それらの逸脱に対してほとんど調整戦略が遂行された。言語行動上の問題はインターアクションに支障がそれほど大きくないので、会話の進み振りによっては調整されなくてもいい場合があるが、コミュニケーション行動問題と文化行動問題の場合はインターアクションに支障が大きいため、すぐに調整されるという理由が考えられるだろう。これも、インターアクションにおけるコミュニケーション行動能力と文化行動能力の重要性を示す証拠の一つとなるだろう。したがって、日本語教育現場では、教師はインターアクション問題の各類型、特にコミュニケーション行動問題と文化行動問題に合わせて調整戦略の使用を中国人日本語学習者に指導することが求められる。

なお、本稿の考察ではまだいくつかの問題点が残っている。まず、調整戦略の分類について、調整しなかった例を、本稿では「調整計画を立てなかったので調整戦略がない」としているが、調整計画を立てたが、「無調整」という調整戦略を使用したと捉えることができる。したがって、これから調整戦略の分類を再考する必要がある。それから、分析資料の会話データが3組しかなく、これからさらにデータ数を増やして、調整戦略の各バリエーション、非言語的調整戦略の使用や言語ゲストー言語ホストの一時的な身分転換などについて、さらに考察する必要もある。また、言語ホストであるJの

評価, また C と J のインターアクション問題と調整ストラテジーとの比較も今後の課題とした
い。

参考文献

- Fairbrother, L. C. (2002). The conversation of norms in contact situations. 千葉大学社会文化科学研究 6 pp.209-217
- ファン, S. K. (1998). 接触場面と言語管理特別研究 日本語総合シラバスの構築と教材開発指針の作成会議要録 pp. 1-16
- ファン, S. K. (2002).対象者の内省を調査する.フォローアップ・インタビュー 言語研究の方法 J.V.ネウストプニー,宮崎里司(編) pp. 87-95 くろしお出版
- ファン, S. K. (2006).接触場面のタイポロジーと接触場面研究の課題 日本語教育の新たな文脈 国立国語研究所(編),pp.120-141 アルク出版
- ファン, S. K. (2010). 異文化接触: 接触場面と言語 言語と社会・教育シリーズ朝倉<言語の可能性> 中島平三(監修)西原鈴子(編) pp.75-99 朝倉書店
- 方穎琳 (2010). 接触場面における中国人日本語学習者のコミュニケーション・ストラテジーの使用—意味伝達問題を解決するための達成ストラテジーを中心に— 言語文化と日本語教育 39
- Hymes, Dell (1972). Models of the interaction of language and social life. In Gumperz, John, & Hymes, Dell (Eds.), Directions in sociolinguistics. pp.35-71. New York: Holt, Rinehart & Winston.
- 加藤好崇 (2006). 接触場面における規範の考察 高見澤孟先生古希記念論文集 pp.48-58 高見澤孟先生古希記念論集編集委員会
- 加藤好崇 (2010). 異文化接触場面のインターアクション 東海大学出版会
- 宮崎里司 (2002). 第二言語習得研究における意味交渉の課題 早稲田日本語教育研究 1 pp.71-89 .
- 村岡英裕 (1992). 実際使用場面での学習者のインターアクション能力について: ビジター・セッション場面の分析 世界の日本語教育 2 pp.115-128 国際交流基金日本語国際センター
- 村岡英裕 (2002). 在日外国人の異文化インターアクションにおける調整行動とその規範に関する事例研究 接触場面における言語管理プロセスについて 接触場面の言語管理研究 2 pp.115-126
- 村岡英裕 (2004). フォローアップ・インタビューにおける質問と応答 接触場面の言語管理研究 3 pp.209-226
- 村岡英裕 (2006). 接触場面における問題の種類 接触場面の言語管理研究 4 pp.103-116
- 村岡英裕 (2010). 接触場面における習慣化された言語管理はどのように記述されるべきか: 類型論的アプローチについて 接触場面の言語管理研究 8 pp.47-59
- Neustupny, J. V. (1985a). Problems in Australian-Japanese contact situations. In Pride, J. B.(ed.), Cross-cultural encounters: communication and miscommunication, pp.44-84. Melbourne: River Seine.
- Neustupny, J. V. (1985b) .Language norms in Australian-Japanese contact situations. In Clyne, M. (ed.) Australia, meeting place of languages, pp.161-170. Pacific Linguistics.
- Neustupny, J. V. (1994a). Problems of English contact discourse and language planning. In Kandiah, T. and Kwan-Terry, J. (ed.), English and language planning: A Southeast Asian contribution. Pp.50-69, Singapore: Academic Press
- ネウストプニー, J. V. (1994b). 日本研究の方法論: データ収集の段階 待兼山論叢 28 日本語学 篇 pp.1-24
- ネウストプニー, J. V. (1995). 日本語教育と言語管理 阪大日本語研究 7 pp.67-82

- ネウストプニー, J. V. (1997). プロセスとしての習得の研究 阪大日本語研究 9 pp.1-15
 尾崎明人 (1993). 「接触場面」の訂正ストラテジー—「聞き返し」の発話交換をめぐって—
 日本語教育 81 pp.19-30 日本語教育学会
 施信余 (2011). 接触場面におけるコミュニケーション調整行動について—日本語母語話者と日
 本語学習者による話し合いの談話資料より 淡江日本論叢 24 pp.73-91

付録：音声・画像データの文字化記号

文字化記号	意味	文字化記号	意味
,	息継ぎ	—	語尾音の伸ばし
↑	上昇音調	(//)	発話の重なり箇所
~	笑う声	(うん)	あいづち
(. .)	2秒以内のポーズ	》 《	発話スピードが遅くなる
(. . 3)	2秒以上のポーズ, 数字はポーズの秒数	(斜体字)	非言語行動の記述
\	音声が小さくなる	/	音声が大きくなる
xxx	聞き取り不能の部分	○○	地名, 機構名
本稿で会話例に現れた人名がすべて仮名である.			

¹ 場合によっては、言い直すストラテジーを使用しても正しい表現に直せなかった例がある。ただし、本稿では考察上の便宜で、正しい表現に直せた場合だけ「言い直すストラテジー」のカテゴリーに分類した。

² 「打酱油(DAJIANGYOU)」は中国のインターネット用語である。本義は「醤油を買う」であるが、2008年からネットスラングとして「自分とは関係ない」という意味で使われている。主役じゃない(芸能界), まじめに仕事をしていない, あるいは大きな仕事を任されていない, などの派生の意味を持っている。(https://ja.wikipedia.org/wiki/打酱油, http://www.ch-station.org/liuxingyu-dajiangyou/での解釈を参考にしたものである)